水泳部

設 立	1960 年 5 月
部 長	安藤 景太（機械工学科）
現在の部員数	53 人（2013 年 7 月現在）
OB/OG 会代表者	佐野 和夫
OB/OG 会会員数	331 人
部 誌	銀泳会 1966 年度～
U R L	http://swimkeio.web.fc2.com/

銀泳会創部

1960 年（昭和 35 年）4 月、日吉から専門課程の小金井キャンパスに移ってきた水泳心を持つ面々、計測工学科の佐野（平）、坪井（平）、上谷（背）、機械工学科の森島（バタ）の 4 人が集まって、藤原記念工学部水泳部（銀泳会）を旗揚げした。部長には、当時計測科の宮尾亘専任講師（後に東京工科大学教授、故人）に三拝九拝してお願いした（第 2 代部長は管理工学科の鷲尾泰俊教授）。

苦労したのはプール探し。手分けをしてキャンパス近辺を歩き回り、幸運にも近場で前原町にある「中川園プール」を見つけることができた。プールは前原小学校の西側に接し、部室となった管理小屋は、野川（源流は日立中央研究所付近）の上に設置されていた。個人営業をされていた中川一家の絶大なるご支援をいただき［その後、工学部が日吉に移転するまで、代々の水泳部メンバーが大変お世話になった（1970 年まで 10 年間使用）］、部活をスタートすることができた。

翌年には 2 期生（工学部 22 期）として、山崎（自）、山口（背）、戸松（平）、赤井（自）ら 8 名、さらに 3 期生として、中村（自）、鈴田（自）、大渕（背）、杉村（平）ら 9 名の強力メンバーを加え、体育会への加盟も承認されて急速に陣容が整いつつあった。夏季強化合宿は、静岡、宇都宮などで数多くのエピソードが生まれるほど楽しく、かつ厳しい合宿生活をこなした。

初の対抗戦

最も緊張したのは、水泳部創部初の対外試合であった。理工系大会で実績を持つ東京理科大学に対抗戦を申込み小金井の学芸大学プールにおいて開催、接戦の末見事に勝利することができた。その後この対抗戦は継続され、参加校も増え、現在の六大学対抗水泳競技大会につながっている。

また、年間競技会の最大の目標に掲げたのは、「東日本理工科系大学選手権水泳競技大会」制覇であり、現在 50 年以上の大会史のなかで慶大理工学部優勝は、1985 年、1987 年と 2 回実現している。

初代主将佐野 2009 年日本水泳連盟会長就任

第 1 期の主将佐野（工学部 21 期）は、日本鋼管（NKK、現 JFE エンジニアリング）において博士号を有する監督として、多くのオリンピック選手を育てた。2001 年には『第 9 回世界水泳選手権大会福岡 2001』開催で、組織委員会事務局長・大会ゼネラルマネジャーとして多大な貢献をした。また 2008 年北京オリンピック日本水泳選手団長として、“水泳・チームジャパン” を率いた。また 2009 年には財団法人日本水泳連盟会長に就任し、さらに 2010 年には国際水泳連盟（FINA）理事にも就任し、Dr. Sano として国内外で活躍中である。2012 年第 30 回ロンドンオリンピックに対しては、「センターポールに日の丸を!」をスローガンに、目標のメダル獲得に向って陣頭指揮を執っている。

OB/OG 会結成と部結成 50 周年

2007 年に OB/OG 会を結成し、佐野会長のもと銀泳会の歴史がさらに積み重ねられて、一層発展することを全員で誓った。2010 年に部創立 50 周年記念の祝賀会を盛会裏に開催するとともに、記念誌を発行した。

卒業後の活躍

限りない水泳愛好者は卒業後も泳ぎ続け、マスターズ大会に参加し世界記録を出すなど、さらに実業団大会、国体にも出場して、活躍している方々も多数いることを付記しておく。

銀泳会の歴史（1960～2013）

水泳部の“期”+ 20 = 理工学部“期”となる。

1960～1970 年頃（小金井時代）

1960、1961 年（主将：1 期佐野）、水泳部立ち上げの揺籃期で、1961 年に実力ある山崎（2 期）、山口（退部）らの加入で、チーム力向上。初の対抗戦を学芸大プールで理科大と行い、勝利をおさめた。プールは大学（小金井）近くの中川園プール（25m）をご主人の好意で使用した。1971 年矢上に移転するまでプールの心配をせず、大学キャンパスを抜け出しいつでも自由に使える天国であった。オフシーズンは千駄ヶ谷室内プールで行った。

初の合宿は 1962 年夏、近藤（退部）の母校・静岡高校で行った。1962 年（主将：2 期山崎）には、若山（旧姓：中村）ら 10 名が入り、山崎主将のもと練習も本格化した。経験の豊富な指導と厳しい言動は素人が多い 2～4 期の部員にとって特殊な存在でもあった。ちなみに 1963 年に出した山崎の自由形 50m の記録、27-8 は 1981 年瀬川（20 期）に 27-1 で破られるまで銀泳会記録として残った。水泳競技会は防衛大での理工系戦に初参加、四大戦（理科大、埼玉大、電機大、慶應）を埼玉大プールで開催（現在の六大学戦の前身）、翌年春合宿は伊豆下賀茂で行った。手違いで水が無く大あわてした。

1963 年（主将：3 期若山）には、水泳経験者の石田、五十嵐（背泳ぎ、退部）らの加入もあり、四大戦で優勝した。夏合宿では初の脱走事件もあり、練習のヤマザキイズムの伝統をつくり出した。秋には資金集めのダンスパーティーで平凡パンチに掲載され、大盛況であった。

1964 年（主将：4 期小倉）、三学部戦開始。理工系戦では、若山（3 期）、石田（5 期）らが細かく得点をあげ、4 位と好成績を得た。夏合宿で稲泳会と同じプールを使用したが、食事カロリーの高さに圧倒される。

1965 年（主将：5 期後藤）、春合宿は別府で行ったが、当時別府大女子水泳部の全盛期で、前年の稲泳会と同様、全日本クラスの練習の違いを見せつけられた。卒業後、現在まで実業団、マスターズの大会の常連として世界記録も出している岩田（6 期）が入部した。2009 年に富士山で遭難した内山（6 期）4 代目部長も入部。

1966 年（主将:6 期石原）、日吉から 1 年生（8 期）の小泉、菱沼が入部。東小金井に自前のプールをもつ法政大工学部との交流が始まり、記録会と現在の三学部戦、体育会葉山部門との対抗戦など、後に継続される対抗戦がほぼ出そろった。部誌を初めて発行した。

1967 年（主将：7 期瀬戸）、理工系戦で、瀬戸が 2 種目 1 位、小泉の 3 種目 2 位の健闘で、総合 3 位と初入賞を果たす。夏合宿で 1 年生（9 期）の脱

四大学戦優勝（東京理科大、埼玉大、東京電機大、慶應義塾大）　於：中川園プールサイド、小金井市立前原小学校近く（1965 年 6 月 20 日）

1966 年 7 月 3 日　東日本理工系水泳競技大会（防衛大学校プール・長水路）

創部から 11 年間（1960～1970）練習/試合等でお世話になった中川園プール（小金井市立前原小学校近く）最後の練習（更衣室屋上）（1970 年 9 月）

走事件があった。

1969 年（主将：9 期二国）、五大学戦（四大学：理科大、埼玉大、電機大に法政大学工学部加わる）の幹事校。部員減少（幹事の 9 期が 2 名、11 期 1 名）もあり、戦績は全体に低調であった。

1970 年（主将：10 期坪井）、2 年生は継続して日吉となり、小金井（3、4 年）、日吉（1、2 年）と人数が二分され、部の運営・練習が不便になった。戦績は理工系戦で坪井（10 期）が 800m 自由形で 1 位。前年中止した三学部戦に代わって医学部との対抗戦を行ったが、その後 1983 年に復活するまで中断した。中川園のプール使用は 1970 年で終了し、12 期（渋谷、大島ら）が最後の利用者となる。

1971～1979 年頃（矢上移転後）

1971 年（主将：11 期安達）頃は当時の部誌を見ると部員不足が一番のトピックのようで（11 期、13 期共 1 人ずつ）、練習パターンは基本的に下記である。またこの年に工学部は小金井から矢上に移転となった。12 期（主将：渋谷）の方々の努力及び佐々木克彦（6 期）のご尽力で、多摩川スイミングスクール/新丸子、荏原製作所/元住吉を練習場所として確保した。

- 3 月末～6 月初：多摩川スイミングスクール/新丸子（週 6 回）
- 6 月中～8 月末：荏原製作所/元住吉（週 6 回）
- 10 月～12 月：陸トレ週 1 回、水泳週 1 回

練習時間は多摩スイが朝 7:30～9:00、荏原は夏休み期間中は夕方のときもあったが、やはり朝 8:00～10:00 が多かった。

ただ、その後の銀泳会の歴史を見ても、当時の他大学の練習環境をみても群を抜いたプール/練習環境と思うが、部員数、また泳力のある部員という観点でも不足であったように思う。例えば小泉（8 期）が 1968 年に出した 1-03-2 という 100m Fr の銀泳会記録は 1981 年まで破られなかった。

特に荏原プールは 6 月中～8 月末の夏の盛りに 10:00～16:00 の一般公開以外は自由に使用でき、またプールサイドの設備も当時としてはかなり充実していて、その後の銀泳会の練習環境を顧みると、しみじみと古き良き日々が思い出される。

1973 年（主将：13 期中川）に初めての女子部員：林（旧姓：寺尾 15 期）が入部した。その後 1975 年に高瀬（17 期）、1977 年に矢田（旧姓：峰松）、阿部（旧姓：藤倉）が 19 期として入部する。

1974 年（主将：14 期宮村）に初めての文系部員：佐藤武男（16 期）が入部した。その後 1976 年に西川（18 期）が入部する。1974 年には新三大戦（武蔵工大、電機大、慶應）が始まった。

1978 年（主将：18 期森）に前期試験の時期が夏休み後の 9 月から夏休み前の 7 月に変更された。

1979 年（主将：19 期石光）に六大学戦で 19 期阿部（旧姓：藤倉）が男子に混じって泳いで得点した。その年の理工系戦にもエントリーし、泳ごうとしたところ、水連から“男女混合レースは罷りならない”とその場でオープン参加に変更させられたことがあった。

1980～1985 年頃

1980 年（主将：20 期瀬川）のときから、夏合宿後の成果を確認するために、千葉大戦（千葉大/理科大/慶應）、東芝戦（銀泳会 20 周年行事も兼ねて）が 8 月末～9 月初に行われるようになり、また練習場所としてもスイミングアカデミー子母口が増えたが、1983 年から荏原プールが閉鎖となったため、一年中温水プールで練習ということとなった。したがって、プールは練習するためだけのものであり、それまで行われていた練習後のプールサイドでのコミュニケーションという場が失われたように思う。1983 年には現在も続いている医

1981 年 6 月 21 日東日本理工系水泳競技大会
800m リレー引継ぎ（東海大学プール・長水路）

学部戦が始まり、1989 年に葉山戦が打ち切られるまで試合数の最も多い時期となる。

1981 年（主将:21 期有沢）のときの新入生（23 期）から理工学部生となる。この年には女子も公式試合に出場したいという要望があり、関東女子公認記録会に 21 期高田（旧姓:太田）他 1 名（途中退部）が参加した。3 年程度（1981、1983、1984）参加したが、泳力のある女子もいなくなったため、その後参加とりやめとなっている。

また 1983 年には 22 期主将：志村が理工系戦の 100m、200m 平泳で共に優勝したが、理工系戦での 2 種目優勝は銀泳会 50 年史の中で 1967 年の瀬戸（7 期）以来 2 人目の快挙である（その後現在に至るまでいない）。夏合宿にて 2 グループに分け、一方が泳ぎ、もう一方がタイム取り、という練習法をやめた。

1984 年には六大学戦と葉山戦の日程が重なっていたことに当日まで気付かず、六大学戦不参加という事態になったが、16 年ぶりに葉山戦には勝利した。

1985 年には体育会競泳の理工学部在籍者の応援を得つつ、理工系戦で初優勝することができた。

この当時も部員数不足（24 期：1 名）、泳力のある部員も限られていたために試合では苦戦が続いたが、上記志村をはじめ 4 年生になって自己ベストを出している者が多いのも特徴である。この頃は春合宿は新潟県六日町（いろり庵）、夏合宿は清水市三保という年が続いた。

1986～1992 年頃

1986 年（主将:26 期山口）のときに 28 期（田端、今井、櫻井）が入学し、銀泳会は黄金期を迎える。この 3 名は皆 100m Fr で 1 分を切り、銀泳会記録も漸く 1 分を切って一気に 58 秒台となり（歴代 1～4 位が 1986 年の記録となる）、自由形短距離でも他大学と遜色のないレベルになった。筆者の記憶ではこの年から 3、4 年間は他大学にはあまり速い人材が入らず、銀泳会のみ 29 期（主将:船木）、30 期（主将:秦）とそれなりの泳力者が入部したのがそれまでに無かったことで、廻り合せなのかそれ以前とは非常に異なり奇異な印象である。したがって 800m リレーのメンバーも全員前年と入れ替わることとなった。

1986～1993 年の間は 1991 年（準優勝）を除き、六大戦は全て優勝であるが、これは文系の 29 期：杉山、園田、原田 晃、30 期：鈴木慎也、31 期：八木らが大きく貢献している。

1986 年の理工系戦は最終種目の 800m リレーの第 4 泳者で玉川大学に逆転され、総合得点でも惜しくも 2 位であったが、1985 年と異なり、銀泳会部員のみの出場であったので、ある意味歴代最高の戦績と言える。

1987 年（主将：27 期鈴木）には体育会競泳の理工学部在籍者の応援を得たが、再度理工系戦に優勝し、1988 年（主将：28 期田端）には当番校として日吉（室外プール）で理工系戦を行い、準優勝している。

1988 年から 5 月のゴールデンウィーク後に室外温水という日吉プールが使用できるようになり（10 月末まで）、夏には水泳部員らしく日焼けできるようになった。この頃から日吉プールが低料金（無料の年もあり）ということもあり、プール使用料を気にせず、前期週 4 日程度、後期(10 月～12 月)も週に 2、3 回水泳練習が行われるようになる。

1989 年にはグリーンウッド（綱島）も練習場所として確保でき、1990 年には体育会との練習時間調整の難しさもあり、スイミングアカデミー子母口の使用を止めることとなった。したがって、この頃から 5 月～10 月は日吉、それ以外は多摩スイ（新丸子）、他というパターンが 2003 年 4 月まで

続くこととなる。

1990 年には銀泳会 30 周年を虎ノ門パストラルで盛大にお祝いした。東芝戦もこの年が最後となる。幹部引継ぎが春合宿から年末(忘年会)に行われるようになったと思われる。

1992 年にはその後の泳光戦へのきっかけとなる四大戦に水泳シーズン後の 10 月に参加する。(シーズン後ということもあり、1998 年頃までは練習日程をこの試合に合わせるということはなかった。)

1993～2001 年頃

1994 年(主将：34 期廣住)のときには当時の部誌を見ると医学部戦に 9 年振りに 1 点差で負けたこと(男女総合)となっているが、この年は女子種目の得点差が大きく(銀泳会は女子部員が少数であったため)、男子は圧勝であったこともあり、あまり問題にはならなかった。翌 1995 年(主将：35 期奥埜)に敗れ、1998 年以降 11 連敗となる。この頃から銀泳会の周りの水泳レベルが一段と高くなる。銀泳会は自由形短距離の加藤(37 期)、バタフライの近藤(39 期)、平泳の遠藤(36 期)、田熊(39 期)らが銀泳会記録を更新しているが、他大学の記録はそれ以上に伸びて行く状況となる。加藤が 1996 年に出した 56-6 という 100m Fr の銀泳会記録は 2006 年まで破られなかった。

練習場所は、温水プールとして多摩川スイミングスクール/新丸子、グリーンウッド/綱島、5 月～10 月は室外温水の日吉プールである。

またこの頃から泳力の高い女性、34 期新井(旧姓：福田)、35 期藤井(旧姓：村田)、36 期肥田木、37 期吉田、松尾(旧姓：日出島)、川瀬(旧姓：戸松)、安田、38 期長崎らが毎年入部、試合等でも活躍し、現在でも 800m リレーの銀泳会記録等、個人種目を含め各種目とも歴代記録の上位に名前が残っている。

1997 年(主将：37 期三好)に千葉大戦が最後の年となる。(以後は千葉大の 8 月末～9 月始めのスケジュール、理科大の試験(9 月中旬)等の調整が付かないとのことであった。)

1999 年(主将：39 期山田)のときには理工系戦でも女子のレースが始まった(それまではオープン参加)。また文系部員を考慮して泳光戦を第一優先順位とし、夏合宿を 9 月に行うようになった。1999 年はこの期間中においては例外的に記録/成績が良い年であった。機関誌“銀泳会”から主将の冒頭挨拶が無くなる。(1997 年から“今シーズンを振返って”というタイトルが無くなった。代わりに 1995 年頃から機関誌の中頃に“幹部挨拶”というタイトルでその年の 3 年生全員の“想い”が掲載される。)

2000 年(主将：40 期永栄)のときに初めて文系の永栄が主将となった。

この辺りは今回記念誌作成に当たり、合宿場所を含めて当時何があったのかどなたに訊いてもあまりよくわからない傾向があるが、全体としては変化の少ない時代を過ごしていたためかもしれない。

2002～2004 年頃

2002 年(主将：43 期飯野)1 月に、幻の 42 期(2 名)が突然退部を表明し、44 期(2002 年 4 月入学、主将：石田)も 2 名(春の時点では 1 名)しかおらず、銀泳会はまさに存亡の危機を迎える。2002 年 3 月の春合宿は 1 人/コースという状況で、試合云々という状況ではなかった。という訳で飯野は 2002、2003 年と 2 年間主将をすることとなった(佐

33 年間(1971～2003)練習でお世話になった多摩川スイミングスクール(東横線新丸子駅近く、門前で)(2003 年 4 月 26 日)

2006 年から練習でお世話になっている東急スイミングスクールたまがわ（東横線 多摩川駅近く）
朝の練習後のプールサイドで（2007 年 9 月 17 日）

野以来 2 人目。本来であれば 2003 年 1 年間である）。

45 期（2003 年 4 月入学、主将：竹下）も 4、5 人しか入部せず試合はいつも綱渡りであった。また不幸は重なるもので 2003 年 4 月には 33 年間使用させて頂いた多摩川スイミングスクール/新丸子が閉鎖となり、代わってエポック中原（南武線武蔵中原駅近く）を使用することになった。この頃から合宿は春・夏共桐花園（藤野町）が多くなる。したがって、この期間は個人的にベストを出した方は多くいたが、試合記録/成績には不明な部分がある。

幹部を 2 年間勤めたためか、幹部引継が年末から泳光戦直後（9 月末～10 月初）となった。すなわち現在の幹部は 2 年生の後期から 3 年生の前期までが任期となっている。

2005～2008 年頃

46 期（2004 年 4 月入学）が 10 名以上入部し、2005 年（主将：45 期竹下）頃からの危機的状況は飛躍的に改善され、47 期以降もコンスタントに新入生が入部している。

2006 年（主将：46 期東野）が室外温水の日吉プール最後の年となる。現在の室内プールとして再開されるのは 2008 年 9 月である。エポック中原（室内プール）が他団体と重なり、混むために室内プールとしてはウォーターメイツ（綱島）、東急スイミングスクールたまがわ（東横線、多摩川駅近く）を使用することとなる。

またこの頃から再び泳力の高い女性、45 期桑木、46 期中山、47 期前田、48 期中込らが毎年入部し、理工系戦の女子種目でも 3 位に入賞するようになった。

2005 年入学の 47 期（主将：松谷、バタフライ）頃から上記の加藤の 100m Fr の記録を更新した安藤（自由形）、加山（背泳）と泳力的に図抜けた方々が入部し、48 期（主将：牧野、平泳）、49 期（主将：中、自由形）と続けて質量共に泳力の高い部員が多く入部しているが、文系の方が多い（理工系戦に出場できない）のも最近の特徴である。

試合については、旧来六大戦/新三大戦が行われていた武蔵工大（2009 年より東京都市大）プールが 2006 年、三大戦が行われていた法政（小金井）のプールが 2008 年に相次いで閉鎖となり、試合会場となるプール確保の観点から試合日程に影響が出ている。したがって近年は文系学生も参加可能な 9 月末～10 月初に行われる泳光戦が Top Priority となっており、また横浜市記録会等にもシーズンオフに出場しているが、8 月～9 月始め頃に新しい試合を設けても良いのではないかと思われる。

2011～2013 年頃

2011 年（主将：51 期長井）に 53 期が 15 名（内マネージャー3 名）入部したのを皮切りに、これ以降安定して選手、マネージャー合わせ 10 名以上入部している。また、2011 年に体育会との折り合いで日吉プールを使用できなくなった時期が半年

2013 年度春合宿全体写真（於：桐花園）
（2013 年 3 月 8 日）

ほど続いたが、2012 年(主将：52 期上田)から幹部の懸命な交渉により、再び使用できるようになった。2013 年(主将：53 期岩永)現在、練習場所として平日に NEC グリーンスイミングクラブ玉川(平間)、土曜日に日吉室内プールを使用している。合宿は春、夏の 2 回行っており、春は毎年桐花園(藤野町)を使用しているが、夏はスインピア矢祭(福島県東白川郡)を使用するケースが増えてきた。

試合については、対抗戦は医学部戦、理工系戦、六大戦、泳光戦に毎年参加しており、その他に随時横浜市、相模原市等の記録会にも参加している。2011 年度以来医学部戦には勝利できるものの、Top Priority に設定している六大戦と泳光戦で総合優勝できない年が続いたが、2013 年の六大戦で、2010 年以来の総合優勝を勝ち取った。また、2012 年より継続して泳力の高い女子選手が入部しており、2013 年の理工系戦では 200m、400m フリーリレーにて銀泳会記録を樹立するなど、女子選手の厚みが増したことを実感している。

第 41 回六大戦　念願の総合優勝(於：法政大学多摩キャンパス内プール)（2013 年 6 月 30 日）

最近の課題としては、ここ数年安定して部員が増加しているため、現在の主な練習場所である NEC プールが手狭になりつつあることが挙げられる。現状では常に使用できる代わりの練習場所が見つからないため、筋トレ組と泳ぐ組で分ける等、メニューを作成する学生が工夫を凝らし、日々練習に励んでいる。

小金井時代の思い出

1. 銀泳会発足前夜

1960 年 5 月のある日、計測工学科の教室で、授業が終わって次の授業が始まる休憩時間に、佐野、坪井、上谷で水泳部を作ろうということで、なんとなく、あっという間に合意ができた。佐野は高校時代水球部にいて、水はお手のもの。坪井は岐阜に疎開したとき長良川で泳ぎを覚え、東京へ戻っても小学校時代は区大会出場。上谷は葉山の湘南ボーイで、これも水泳は大好き。その日はきっと暑い日ではなかったのかと思う。

誰か他の学科に水泳の好きな者はいないかとのことで、佐野、上谷からの提案で、坪井がリクルートで機械工学科の森島、近藤やほか 2 名に声をかけた。しかし 4 年まで在籍したのは森島のみであった。

そして立ち上げた水泳部にニックネームを付けることを佐野が提案して、工学部の前身となる藤原工業大学の創立者藤原銀次郎先生の一文字を戴いて“銀泳会”と称し、格好は整った。

少人数ではあったが、佐野がキャプテン、上谷がマネージャーという役割が決まり、活動を開始した。

上谷は小金井に下宿をしていたことから、近隣を当たり、まずはどこかホームグラウンドを設けようということになった。自転車で、まずは貫井の市営プール(50m)を見つけ、早速泳いでみた。そこは湧水を利用していることから、ものすごく冷たかったのを覚えている。これでは練習になりにくいとのことから、さらに当たることにした。プール探しの合間には、千駄ヶ谷の東京体育館の 50mプールにも何度か泳ぎに行った。

それから、小金井村の近くに中川園という個人

で経営をしているところがあるということで、みんなで出かけ、親父さんに会って、貸してもらう交渉をした。その時期はまだプールがオープンしているのでなく、青い藻がついていた。それでも泳いだ。そこで中川園の風呂に入れさせてもらって、体を温め、帰ったのを覚えている。太っ腹な、もちろん太鼓腹であり、風情ともども親しみのもてる親父さんであった。奥さんや子供たちもいて、家族経営の良い雰囲気であった。これが、のちに10 年近く続くことになったことの出会いである。賃借料は 1 人 1 日 20 円であった。ここが銀泳会のスタートラインである。

夏は、プールの監視を引き受けながら練習を開始した。　さらに部と名前のつくことから、泳げない宮尾亘(計測工学科)に部長をお願いした。上谷の卒論担当教員である。すべては気心から歴史が始まった。

翌年には 2 期生として、山崎(自)、山口(背)、戸松(平)、赤井(自)ら 8 名、さらに 3 期生として、中村(自)、鈴田(自)、大渕(背)、杉村(平)ら 9 名の強力メンバーを加え、体育会への加盟も承認されて急速に陣容が整っていった。夏季強化合宿は、静岡、宇都宮などで数多くのエピソードが生まれるほど楽しく、かつ厳しい合宿生活をこなした。

2. 銀泳会初レース

銀泳会の初の対外戦は、1961 年 6 月に同じ小金井で慶應と反対側にある学芸大学のプールで行われた。吾輩のアルバムによれば、「佐野、山崎両君の活躍で圧勝!」とある。

初戦で初勝利である。素晴らしい対応相手を見つけたものである。

(対戦相手決定)

初戦はなんとしてでも優勝の成果を挙げたかったので、銀泳会が当番校となり、上谷が会場を、山崎(2 期)が対抗戦相手を中心になって模索し、当時、東日本理工系大会で活躍していた東京理科大と小金井の学芸大プールを借用して、チャレンジマッチを組むことが決定した。

そして接戦の末、めでたく優勝を飾った。その後この対抗戦は継続され、四大学対抗戦につながっていると思われる。

水泳部初代(理工学部 21 期)主務　上谷 達也

矢上移転時の苦労話

1971 年工学部キャンパスが藤原工大の流れをくむ小金井から矢上に移転になり、1970 年入学の我々12 期(理工学部 32 期)はこの矢上の 1 期生である。1 年生のシーズンはまさに移転の過渡期で、授業は日吉、練習は土日に小金井の中川園という生活であった。12 期は中川園を知っている最後の世代である。

矢上への移転後に水泳部が継続できるかは、中川園(小金井)という大変恵まれた練習環境に代わる新たなプールを日吉の近くに確保できるかにかかっていた。しかも部を統率する学年である 1 年先輩の 11 期は安達さんだけ(1 名)であったので、1 年生の渋谷、平山と大島がシーズンオフに入るとプール探しに奔走することになった。オーナーのご厚意で借用していた中川園と同様な条件で使用できる場所が簡単に見つかるわけもなく、1971 年はまさに水泳部存亡の危機であった。

そんな状況の下、やっとたどり着いたのが新丸子駅近くの多摩川スイミングスクールである。毎朝のプール掃除を引受けることを条件に早朝に全コースを借用できることになった。全ての練習が授業の前の早朝に限られるのは従来の習慣からは大きな割り切りが必要であったが、これで何とか水泳部がつながると安堵したことをよく覚えている。しかし日中屋外のプールで練習したいとの気持ちは捨てがたく、日吉の学校プールの部分借用もチャレンジしたが十分な量はとても確保できなかった。

そんな中、水泳部 OB の 6 期(工学部 26 期)佐々木克彦から朗報が届いた。佐々木が勤める荏原製作所の元住吉にあるプールを貸してもらえるかもしれないとのことであった。早速、安達、渋谷、平山と私で荏原製作所を訪問し人事部長の面接を受け、幸い我々の是が非でもプールを使わせていただきたいとの熱意が通じたのか、一般公開時のプール監視を手伝うことを条件に貸してもらえることになった。

結果的には多摩川スイミングスクールも荏原製作所も大変良い条件で使用できることになり、無事 1971 年のシーズン初めから矢上移転と共に

新たな水泳部をスタートできることができた。（多摩川スイミングスクール：2003 年、荏原製作所プール：1983 年と各々のプール閉鎖まで銀泳会は利用させて頂いた。）

水泳部 12 期(理工学部 32 期)　大島 恵

現役の活動状況

【練習】

・活動日：原則月・火・木・金・土の週 5 回。
（月～金 7:00/8:00～9:30・土 18:00～20:00）

・活動場所：NEC グリーンスイミングクラブ玉川（南武線 平間駅近く）・日吉プール

・合宿：春夏の年 2 回。原則 6 泊 7 日。

【主な年間行事・大会】

・3 月　春合宿
　　4 年生を送る会

・5 月　理工学部医学部対抗水泳競技大会

・6 月　東日本理工科系大学選手権水泳競技大会
　　（我が部唯一の公認試合）
　　南関東六大学対抗水泳競技大会

・9 月　夏合宿
　　泳光戦

・10 月　OB/OG 会

上記の他に、不定期に横浜市・相模原市水泳協会が開催する記録会に参加している。

【備考】

・9 月に行われる泳光戦での優勝を目標に、各々の泳力に合わせて練習に励んでいる。

・部に監督及びコーチがいないため、幹部の内数名が練習メニューを作成する等学生主体で活動している。

・日吉キャンパスの塾生会館に部室があり、部の運営における重要な拠点となっている。

・毎年現役部員が部誌を作成し、OB/OG に活動状況を報告している。

・10 月の OB/OG 会では現役の活動報告及び OB/OG の近況報告が行われ、双方の親交を深める重要な場となっている。

・　毎年現役部員が部誌を作成し、OB/OG に活動状況を報告している。

創部 7 年目の 1966 年からほぼ毎年発行されている機関誌 “銀泳会” (その年の試合結果、部員紹介、OB・OG の近況、各種記録、OB・OG を含めた住所録等が掲載されている)。過去 48 年に及ぶバックナンバー全冊が揃っている。（理工学部 26 期岩田保管）。

東京工科大学で開催の泳光戦でのレース。出場校は、慶應義塾大学理工学部水泳部（銀泳会）のほかに、東京理科大学、東京都市大学、東京電機大学、東京工科大学、法政大学、日本女子大学。自由形　2012 年 9 月 16 日。

2012 年度 OB・OG 会－初代主将、日本水泳連盟会長 佐野和夫のロンドンオリンピック報告会を中心に開催(2012 年 10 月 22 日　於：日吉グリーン食堂)

銀泳会年表（1960～2013）

西暦	部長	幹部	主将	主な試合（数字：順位） 葉山	医学部	三大	六大	理工系		新三	泳光	春合宿	夏合宿	使用プール 屋内			屋外
就任				卒業生数	三学部	慶法	五大 四大	場所	場所		五大						
1960	宮尾	1	佐野 和夫														中川園
1961	亘	1	佐野 和夫									欠	欠				中川園
1962		2	山崎 秀夫				NA	埼玉(短水)	NA 東工大			欠	静岡高校				中川園
1963		3	若山 喬樹	4			1	中川園	NA 防衛			下賀茂(伊豆)	宇都宮				中川園
1964		4	小倉 宣弘	8		1	1	中川園	4 防衛			下賀茂(伊豆)	鰍沢(山梨)				中川園
1965	鷲尾	5	後藤 昌三	8		1	1	中川園	8 千葉			別府(大分)	鰍沢(山梨)				中川園
1966	泰俊	6	石原 近和	7		1	1	3	埼玉(短水)	8 防衛		別府(大分)	鰍沢(山梨)				中川園
1967		7	瀬戸 靖夫	11	1	1	1	2	埼玉(短水)	3 防衛		峰温泉(伊豆)	櫛形 (山梨)				中川園
1968		8	小泉 芳雄	12	1	1	1	3	埼玉(短水)	10 法政(木月)		蓮台寺(伊豆)	鰍沢(山梨)				中川園
1969		9	二国 恒一	3	2	欠	2	4	中川園	7 東海		峰温泉(伊豆)	岡部 (静岡)				中川園
1970		10	坪井 晴人	9	2	1	2	3	埼玉	7 東工大		六日町(新潟)	日置川 (和歌山)				中川園
1971		11	安達 昭夫	2	2		1	NA	法政(木月)	NA 水産大		軽井沢	出雲崎(新潟)	多摩川(新丸子)			荏原(元住吉)
1972		12	渋谷 康雄	5	2		1	1	千葉	4 東海		戸倉上山田	戸倉上山田	多摩川(新丸子)			荏原(元住吉)
1973		13	中川 毅彦	1	2		3	6	武蔵工	6 東海		戸倉上山田	可美村(浜松)	多摩川(新丸子)			荏原(元住吉)
1974		14	宮村 栄二郎	4	2		3	5	武蔵工	8 東海	2	戸倉上山田	館山（千葉）	多摩川(新丸子)			荏原(元住吉)
1975		15	中野 護	1	2		2	3	武蔵工	5 東海	1	蓼科	可美村(浜松)	多摩川(新丸子)			荏原(元住吉)
1976		16	松本 一郎	4	2		2	3	埼玉	5 東海	1	蓼科	可美村(浜松)	多摩川(新丸子)			荏原(元住吉)
1977		17	森田 茂男	5	2		2	4	武蔵工	欠	1	館山(千葉)	可美村(浜松)	多摩川(新丸子)			荏原(元住吉)
1978		18	森 達也	4	2		2	2	武蔵工	欠	1	館山(千葉)	可美村(浜松)	多摩川(新丸子)			荏原(元住吉)
1979	中島	19	石光 義幸	3	2		2	2	武蔵工	5 拓大	1	六日町(新潟)	大沢温泉(西伊豆)	多摩川(新丸子)			荏原(元住吉)
1980	真人	20	瀬川 裕之	4	2		2	3	武蔵工	8 日大	2	六日町(新潟)	大沢温泉(西伊豆)	多摩川(新丸子)	子母口		荏原(元住吉)
1981		21	有沢 繁	7	2		2	3	埼玉	5 東海	2	六日町(新潟)	櫛形 (山梨)	多摩川(新丸子)	子母口		荏原(元住吉)
1982		22	志村 達久	5	2		2	3	武蔵工	7 東海	2	六日町(新潟)	三保 (清水/静岡)	多摩川(新丸子)	子母口		荏原最終？
1983		23	堀田 和嗣	4	2	1	2	4	武蔵工	4 日大	2	六日町(新潟)	三保 (清水/静岡)	多摩川(新丸子)	子母口		
1984		24	武本 粧紀子?	3	1	1	3	欠		7 国士舘	1	六日町(新潟)	三保 (清水/静岡)	多摩川(新丸子)	子母口		
1985		25	渡辺 努	5	1	2	2	3	武蔵工	1 玉川	2	六日町(新潟)	三保 (清水/静岡)	多摩川(新丸子)	子母口		
1986		26	山口 俊夫	1	1	1	1	1	武蔵工	2 法政(多摩)	1	六日町(新潟)	三保 (清水/静岡)	多摩川(新丸子)	子母口		
1987		27	鈴木 秀登	6	2	1	1	1	埼玉	1 法政(多摩)	1	六日町(新潟)	三保 (清水/静岡)	多摩川(新丸子)	子母口		
1988		28	田端 祐二	3	1	1	1	1	武蔵工	2 日吉	1	宇佐美(伊豆)	野沢温泉(長野)	多摩川(新丸子)	子母口		日吉(室外)
1989		29	船木 陽	11	1	1	1	1	武蔵工	6 玉川	1	芦の牧(福島)	鰍沢(山梨)	多摩川(新丸子)	子母口	グリーンウッド(綱島)	日吉(室外)
1990	内山	30	秦 一成	6		1	1	1	法政(多摩)	NA 法政(多摩)	1	宇佐美(伊豆)	芦の牧(福島)	多摩川(新丸子)	子母口	グリーンウッド(綱島)	日吉(室外)
1991	太郎	31	木元 康仁	6		1	1	2	武蔵工	NA 玉川	2	宇佐美(伊豆)	鰍沢(山梨)	多摩川(新丸子)		グリーンウッド(綱島)	日吉(室外)
1992		32	藤井 元樹	11		1	2	1	武蔵工	10 法政(多摩)	1	1 宇佐美(伊豆)	熱海	多摩川(新丸子)		グリーンウッド(綱島)	日吉(室外)
1993		33	涛川 貴之	16		1	1	1	埼玉	12 法政(多摩)	1	1 宇佐美(伊豆)	鰍沢(山梨)	多摩川(新丸子)		グリーンウッド(綱島)	日吉(室外)
1994		34	廣住 文彦	7		2	3	5	武蔵工	NA 法政(多摩)	2	2 稲取(伊豆)	春日温泉(長野)	多摩川(新丸子)		グリーンウッド(綱島)	日吉(室外)
1995		35	奥埜 貢士	6		2	3	5	武蔵工	13 法政(多摩)	2	4 稲取(伊豆)	春日温泉(長野)	多摩川(新丸子)		グリーンウッド(綱島)	日吉(室外)
1996		36	遠藤 啓太	11		1	2	4	法政(多摩)	7 法政(多摩)	1	NA 稲取(伊豆)	稲取(伊豆)	多摩川(新丸子)		グリーンウッド(綱島)	日吉(室外)
1997		37	三好 友彦	10		1	3	2	武蔵工	NA 中央	1	5 大磯プリンス	春日温泉(長野)	多摩川(新丸子)		グリーンウッド(綱島)	日吉(室外)
1998		38	山村 賢治	10		2	3	2	法政(多摩)	7 中央	1	4 稲取(伊豆)	春日温泉(長野)	多摩川(新丸子)		グリーンウッド(綱島)	日吉(室外)
1999		39	山田 大介	10		2	2	4	武蔵工	3 中央	2	2 菅平(長野)	飯島(長野)	多摩川(新丸子)			日吉(室外)
2000		40	永栄 宏之	9		2	3	4	埼玉	12 中央	2	6 菅平(長野)	春日温泉(長野)	多摩川(新丸子)			日吉(室外)
2001		41	神谷 洋平	12		2	2	5	法政(多摩)	8 中央	2	4 菅平(長野)	菅平(長野)	多摩川(新丸子)			日吉(室外)
2002		43	飯野 悠介	6		2	3	4	法政(多摩)	NA 中央	3	4 桐花園(藤野)	桐花園(藤野)	多摩川(新丸子)			日吉(室外)
2003		43	飯野 悠介	4		2	3	4	法政(多摩)	NA 中央	2	2 桐花園(藤野)	桐花園(藤野)	多摩川最終	エポック中原		日吉(室外)
2004		44	石田 達夫	0		2	3	3	法政(多摩)	NA 中央	1	1 桐花園(藤野)	桐花園(藤野)		エポック中原		日吉(室外)
2005		45	竹下 覚	5		2	3	2	法政(多摩)	4 法政(多摩)	1	1 前橋(群馬)	桐花園(藤野)		エポック中原		日吉(室外)
2006		46	東野 羅磨	2		2	3	2	法政(多摩)	NA 法政(多摩)	1	1 前橋(群馬)	桐花園(藤野)	多摩川(東急)		ウォターメイツ(綱島)	日吉(室外)
2007		47	松谷 修	4		2	3	3	法政(多摩)	NA 法政(多摩)	1	2 前橋(群馬)	桐花園(藤野)	多摩川(東急)		ウォターメイツ(綱島)	
2008		48	牧野 伸哉	12		2	1	1	法政(多摩)	NA 中央	1	1 前橋(群馬)	桐花園(藤野)	多摩川(東急)		ウォターメイツ(綱島)	日吉(室内)
2009	菅	49	中 敦	12		1	1	2	法政(多摩)	6 中央	1	1 桐花園(藤野)	桐花園(藤野)	多摩川(東急)		ウォターメイツ(綱島)	日吉(室内)
2010	泰雄	50	阿部 遼	8		1	中止	2	法政(多摩)	6 中央	1	2 桐花園(藤野)	笠松(茨城)	多摩川(東急)	NEC グリーン	ウォターメイツ(綱島)	日吉(室内)
2011		51	長井 秀興	6		1	中止	2	法政(多摩)	8 中央	中止	2 桐花園(藤野)	桐花園(藤野)	多摩川（東急）	NEC グリーン		日吉(室内)
2012	安藤	52	上田 哲希	13		1	中止	TBD	法政(多摩)	9 中央	中止	2 桐花園(藤野)	スインピア(福島)	多摩川（東急）	NEC グリーン		日吉(室内)
2013	景太	53	岩永 健太郎	5								桐花園(藤野)		多摩川（東急）	NEC グリーン		日吉(室内)
				331													

注：葉山、慶法は 1967 に第一回の記述あり
：NA：Not Available（順位不明）
：欠：欠場
：東芝は記録会
：男女別に順位が異なる場合は、過去との一貫性の観点から男子分を採用

GW 合宿は 1972 － 76 頃実施されていたようです

1,2年使用した北里、綱島の駅前等は省略
代々木(現在も使用)、千駄ヶ谷、辰巳も省略

：日産スポーツプラザ（1985-2002）??
：凸版 ??
：当番校